令和６年度 自治医科大学・佐賀大学・長崎大学
合同夏期地域医療実習レポート

【自治医科大学】

議題：
①実習全体を通して学んだこと
②災害医療・救急搬送には何が必要で、本土と離島で何が違うのか、離島のハンデを少しでも埋めるためにできること

（1）自治医科大学医学部医学科 3 年生

①今回の夏季実習のテーマは災害医療、救急医療であった。初日にドクターヘリやその運用方法、佐賀赤十字病院の施設や医療器具、装備の見学を行い、緊急時どのように組織が動くかの講義を受けた。2 日目は離島に行き島の現状の見学を行うとともに、島の診療所の見学をさせていただきどのような施設や器具があるのかを知ることができた。また、島から本土へのドクターヘリでの救急搬送のロールプレイングも行った。これにより初日で学んだ受け入れがわの病院の体制と要請を行う島との連携両方面から理解することができた。また、実際島を訪れることで、島の診療所長の先生が島の住民の方々に信頼されていることや先生方の医療面、生活面でのリアルを知ることができた。実際、医療面では自信を持って診断できない場合も多々あるとおっしゃっており、少しの手違いで患者を危険な状態にさせてしまい、不安だったことなどを直接聞くこともできた。

②災害医療、救急搬送に必要なものは状況に合わせて自分の中での最善の判断を行える判断力と、それを支えうる知識量であると自分は考える。一方で個人で行える行為には限りがあるのでマンパワーが必要になる状況においては協力者が必要になると考える。そのためには日頃より多方とのコミュニケーションが必要になってくると考える。離島では医療器具、施設ともに本土に比べ不足していると感じた。また、島によるとは思うが道路が狭かったり、十分に舗装されていないなどの理由で車の移動が難しい場合があると感じた。このようなハンデを埋めるためにも先ほども述べた判断力、知識、コミュニケーションは有用であると考える。

二泊三日の短い研修ではあったが、災害医療、救急搬送の本土と離島での現場、貴重な施設や装備を学べるのと同時に、他の 2 大学の学生と交流することができた貴重な実習であった。

（２）自治医科大学医学部医学科２年生

①私が今回の実習を通して学んだことは、離島での医療のあり方です。将来離島で働く予定の人間としてこの実習に参加しましたが、離島での医療についてあまり具体的なイメージはなく、漠然と少ない医療資源で対処しなければならないということを思っていただけでした。しかし、離島に行って診療所の先生や引率の先生の話を聞き、離島での医療で必要なことは患者さんを死なせないこと、つまり診療所の医師として求められるのは、患者さんがどのような状態で、急いで搬送しなければならないのか否かを判断する能力だということを知りました。判断のためには、診療所にあるエコーやレントゲンなども使えるようになっておかなければなりませんし、現在学校で学んでいる、生理学など基礎医学の知識も大事なので、しっかり勉強しようと思いました。

②本土と離島での大きな違いは医療資源だと思います。それは災害医療の時も変わらず、救急搬送が必要な時はドクターヘリなどを要請する必要がある点が、相違点だと考えます。離島のハンデを少しでも埋めるためにできることとしては医師自身の能力を磨く点、住民の理解を得る点の２点が必要だと思います。本土と違い、離島では医師は１人しかいないため、その医師の能力によって治療、特に救急搬送が必要な場合の治療は大きく違ってくると思います。迅速に適切な判断ができるよう、幅広い医学知識の習得を心がける必要があると思いました。また、島の住民の理解を得ることも、離島のハンデを少しでも埋めるためには必要だと思います。救急搬送の時、自宅からドクターヘリのヘリポートまで運ぶのを住民に手伝ってもらうことや、船で本土まで運ばなければならないとなった時に島民に船を出していただくことがあるかもしれません。そのような時のために、島の住民の理解を得ておく必要あると思いますし、それは日頃のコミュニケーションによって育まれるものだと思います。普段から積極的に島民と話しておくことが大切だと思います。

（３）自治医科大学医学部医学科１年生

①今回の実習のテーマである災害医療について、佐賀県でどのような組織があり、どのような活動や対策をしているのかなど、様々なことを知ることができたが、一番学びが多かったのはやはり離島での診療所訪問と島外搬送訓練だ。将来働くことになる島の雰囲気を知ることができただけでなく、どのような姿勢で働く必要があるかわかった。様々な病気を一人で診る必要があるため、医師として勉強し続け、多くの知識を持っている必要があるということを改めて実感したのはもちろん、島の人々との信頼関係を築いていくことの大切さも知った。島の人々の家族構成を知ったり、たくさんコミュニケーションをとることで、その人に合った治療をすることができるということがわかったり、頼りやすい雰囲気気を持ちフットワークを軽くしておくことが大切ということがわかったりした。また、病院の経営のことまで考えなければならないということを初めて知り、何でもしなければならないのだと思った。つまり、何でもやる姿勢をもって島に行かなければならないと知った。また、一年生ということで医療知識含めてほとんど何も知らない状態で今回の実習に臨んだが、立場や状況に甘えて何も知ろうとしないのは勉強にならないし、言い訳にしてはいけないということを、今回引率してくださった池田先生の熱いご指導によって気づくことができた。何でもやる姿勢を持つには何でもできる能力も求められることを考えると、様々なことを言い訳せず知ろうとすることはやはり大切だと考える。医療的な学びとしては、対応は早ければ早いほうがいいということで、島外搬送が必要になったときに、ドクターヘリのほうが船での搬送より多くの関係機関に連絡しなければいけないことを考えると、船で搬送したほうが早い場合が多く実際船での搬送が圧倒的に多いということを知った。

実習全体を通して今後の学習のモチベーションを高めることができたり、漠然としていた島での勤務について具体的に知ることができたりしてとても有意義であったと思う。

②島は本土に比べて医療資源が少なく制約が多いため、十分な対応ができないということが考えられるが、医師として少しでも知識や技術を身に着けできることを増やしておくことが大切であると考える。また、医師としての技能面だけでなく、島という小さいコミュニティでは、島の人々との信頼関係を築いておくことで可能になることもあると考える。

（4）自治医科大学医学部医学科１年生

①今回初めて夏季研修に参加して実際に離島へ行くことができた。神集島診療所では施設見学を行い、設備を見学したことで将来的にどのようなスキルが必要となるか知ることができた。具体的には、医師の方がレントゲンを撮っていたり、内視鏡の設備があったりしたことでレントゲンの撮り方や、内視鏡の技術は確実に必要なことが分かった。また、島民の方と牛草先生がお話ししていらっしゃる姿を見て、そもそも医者である以前に一人の島民として島の住人の方々と接していけるようにならなければいけないと感じた。

②本島と離島では、医療の設備が本島のほうが整っているためそもそも対応できる患者さんの病状が異なる。そのハンデを補っていくためには離島にいる医療従事者と島民の方との連携がスムーズにできることにしておき、迅速に島から本土へと搬送ができるようにしておくことが必要だと思う。